様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 17 日現在

機関番号：　14101
研究種目：　挑戦的萌芽研究
研究期間：　2010　～　2012
課題番号：　22650049
研究課題名（和文）　明治期商家銅版画資料に関する歴史情報学的研究
研究課題名（英文）　a study on merchants copper plate engravings in the Meiji era in the field of historical information studies

研究代表者
菅原　洋一（SUGAWARA YOICHI）
三重大学・大学院工学研究科・教授
研究者番号：　70144227

研究成果の概要（和文）：
本研究は、明治期の銅版画による商家営業案内等の目録を整備し、これを主資料として、商家の活動形態、建築形態を把握し、情報伝達手段としての銅版画の特質を明らかにするものである。東北・四国の一部、沖縄を除く資料約100点の収集と目録作成、分析の結果、これらは①刊行時期が明治10～30年代の20年間ほどに限られる、②作成目的や表現方法が類似する、③全国各地域を対象とする刊行物がある、等の特色があり、明治期商家の実態を全国的な視野で把握できる学術資料として価値があることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：
This study aims to clarify the actual conditions of merchants and their houses in the Meiji era by analyzing the merchants guide books illustrated with copper plate engravings. And at the same time, this study aims to clarify the characteristics of the copper plate engravings as the means of communication. By analyzing about 100 books all over Japan, it became clear.
1. They were published only in the Meiji 20s and the 30s all over Japan.
2. The purpose and the expression method of each documents are similar each other, and it is possible to institute comparison between them to grasp the actual conditions of the merchants and their houses.

As conclusion, these documents are valuable as the academic resource to analyze the actual conditions of the merchants and their houses in the Meiji era .

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	700,000	0	700,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,700,000	300,000	2,000,000

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：情報学・図書館情報学・人文社会情報学
キーワード：歴史情報・明治・銅版画・商工便覧・垣貫一右衛門・川崎源太郎・高崎龍太郎・大日本博覧図

１．研究開始当初の背景

銅版画による商家の営業案内の類は、詳細な図像表現の可能な宣伝広告の手段として、明治中頃に各地で制作されたが、20 年ほどで衰退した。これらは一枚物のほか、「商工便覧」等の書名で編集され、その地域の有力商家を一覧できる場合が多い。本研究の対象は、こうした書籍形態の銅版画資料である。

これらについては従来、精緻な表現のなされている大日本博覧図系の資料は地域の歴史資料として、また一部の画工については美術史的な観点からの評価がなされてきた。しかし、銅版画資料の大半を占める稚拙な描図表現を伴うものは、その稚拙さ故にこれまで評価に乏しく、その資料的な信頼性についての検討が行われる事も少なかった。

これらの銅版画資料は描画表現の巧拙に拘わらず、その地域の有力商家を一覧できる場合が多く、商家の活動を家屋敷と一体として把握できる点に特色がある。これらから信頼できる情報を抽出し、歴史資料として活用するための、資料に関する基礎的研究を行う必要を感じた事が研究の発端である。

２．研究の目的

本研究では基本的目的を、以下のように設定した。

（１）商家を描く銅版画資料を全国的に探索、収集し、記載内容に関する目録、および各資料の書誌的事項に関する一覧表を整備する。

（２）各資料の刊行関係者、刊行方法、編集方針や相互関係を検討し、情報伝達手段としての資料の特質を明らかにする。

（３）商家の活動形態、建築形態の全国的、地域的な傾向を把握する。

３．研究の方法

（１）資料の探索・収集

国立国会図書館その他の図書検索システムで数次のキーワード検索を行ない、東北及び四国の一部を除く資料約 100 点を確認した。また、資料所蔵機関として国立国会図書館のほか、国文学研究資料館、浜松市立図書館、東京大学経済学部資料室、神奈川県立博物館、千葉県立博物館、西尾市立岩瀬文庫等を確認した。

更に古書市場での原資料や復刻版の所在確認を行い、数十点を収集した。収集資料を国立国会図書館近代デジタルライブラリー本と比較すると異版が存在し、内容の異同が少なくないことが知られた。

（２）目録、一覧表の作成

大半の資料は国立国会図書館が所蔵し、同館近代デジタルライブラリーで閲覧できる事が確認できたので、原則としてこれに基づいて目録化を図り、同館非所蔵資料は、所蔵館で撮影した写真や復刻版に基づいて、目録作成を行った。目録は各資料ごとに商家等の名称、屋号、業種、所在地、備考の 5 項目について作成した。

また、各資料の発行年月、対象地域、書名、出版地、体裁、刊行関係者、序・緒言等、所蔵等の書誌事項についての一覧表を作成した。

（３）編輯・刊行の方針と内容の検討

①序・緒言等の記載内容、描画表現、書誌事項の検討により、資料ごと、刊行関係者ごとの編輯・刊行の方針を抽出し、更に資料相互の関連性を分析し、資料群の系統的把握を目指した。

②現存する家屋と描画との比較を行い、資料の信頼性を検証した。

③商家の活動形態、建築形態の全国的、地域的把握のため、漁家建築の家屋構成、看板、屋根上の小塔、洋風意匠要素の導入などの特定主題について検討した。

４．研究成果

（１）目録、一覧表

所在確認を行った約 100 点の資料を対象として、掲載商家に関する目録、書誌事項等の一覧表を作成し、今後の研究の進展に資する基礎資料を整備した。

（２）明治期商家銅版画資料刊行の基本的問題

①刊行年代

刊行年代は明治 10 年代から 30 年代初頭までの、ほぼ 20 年間に限られ、30 年代初頭にはこの種資料が飽和状態となり、必要性が薄れたものと見られる。

これらが盛行した時期は、各地の商業、工業、農業が近代化を遂げつつあり、都鄙の景観も急激な変化を遂げた時期である。この資料群の大きな特色は、このような近代化の途上の時期の具体的状況を全国的に比較できる点にある。

②掲載対象

掲載対象は募集、勧誘によるが、豪商、名家、繁昌を以て注目される家々を基本としている。彼等は各地の近代化に主体的に関わった層であり、この資料群はそのような対象の家屋敷の構成や形態、利用の状況を示すものである。

③刊行関係者

編輯、発行に関わった関係者を刊行順に列記すると次の通りである。経歴が知られる例は少なく、殆どが無名の存在である。

杉岡政治（大阪）、垣貫一右衛門（大阪）、川崎源太郎(堺)、福井熊次郎(大阪)、吉田保次郎(東京)、石田有年(京都)、石田才次郎(京都)、高瀬安太郎(愛媛)、池内太七(姫路)、深満池源次郎(東京)、新井藤次郎(東京)、田中義幸(東京)、高崎龍太郎(函館)、森弥三郎(大阪)、中谷与助(堺)、西川久吉(大阪)、青山豊太郎(東京)、館岸(函館)、館道策(函館)、清水吉康(大阪)

④刊行対象地と刊行地

この種資料の存在が未確認なのは、青森・岩手・宮城・秋田・山梨・徳島・高知・沖縄である。それ以外の地域では、資料が確認でき、全国的に刊行されていたことが分かる。

出版の拠点を刊行者の居住地とすれば、堺が群を抜き、33 点の出版がある。その殆どは川崎源太郎と龍泉堂の関与するものである。

大阪を刊行地とするものも 10 点を数え、関係者や発行所として杉岡政治、垣貫一右衛門、森弥三郎、西川久吉、上田利平、鴻英社、春陽堂などの名が挙げられる。

東京は石原徳太郎による『大日本博覧絵』、青山豊太郎による『日本博覧図』の出版地であり、石原徳太郎、青山豊太郎のほか、深満池源次郎、新井藤次郎や精々堂、日本博覧絵出版所、精行舎、精行社などが知られる。

以上のほか、函館を出版地とする例が 5 点あり、いずれも高崎龍太郎ないし館道策、北島社による出版である。

⑤書名

書名は、出版関係者により、一定の形式に収斂し、また、作成の目的をも反映したものとなる。書名を整理すると次のようになる。

「案内」、「独案内」を書名に含む：江戸期の買物独案内類に由来する書名であるが、江戸期に比べ銅版の店構えの図を添えた点に新規の特色がある。

「魁」を書名に含む：明治 10 年代後半に限られる。掲載商家等の先進性を強調するものであろう。

「商工」、「商工便覧」を書名に含む：この書名の刊行物が大多数を占める。

「博覧」を書名に含む：　『東京商工博覧絵』、『大日本博覧絵』等が挙げられ、いずれも東京を刊行地とする。掲載対象は農家も含み、図版が大きく精密である。

⑥刊行の目的

買物案内：　「案内」、「独案内」、「魁」、「商工」、「商工便覧」などを書名とする大半の資料は、買物案内を目的とする。内容は、店主の氏名、屋号、紋、営業種目、商品、住所が基本であり、宣伝の惹句や褒状を掲載する事もある。

博覧図：　掲載される家々は地域名望家や農村産業に関わる例が多い。図版は精緻であり、地域名望家を記録顕彰するものである。

地域の歴史の記録：　激変し失われていく風土の形状や由来を後世に伝えることを目的とするもので、『岐阜県美濃名誉図誌』がその例である。

北海道開拓：　北海道への移住者に対する情報の提供を目的とする。

（３）描画表現

各資料は描画表現により、概ね次の３つの傾向を持つものに大別できる。

①　構図の歪曲を伴う稚拙なもの

建物各部位の線が歪み、各部の平行関係、比例、形態や各建物の相対的関係にも正確さの認められない稚拙なもので、近世の木版名所図会類に比較しても見劣りがする。現実にこのようなものが流通していたのは、表現の稚拙さを越えてなお、これらが情報として有益と認められていた事による。

②西欧的透視図法によらない説明図的手法

垣貫一右衛門、館道策、川崎源太郎らの刊行物には殆ど同じ表現の緒言等で、描画の方法等が示されている。ここでは絶対的な規模、位置関係の正確さは念頭になく、実用的な説明図として羅列的、説明的な表現を行う事が自覚され、更に家屋の詳細な表現よりも各家の活発な営みの表現に主眼を置くことが明示されている。

このために建築の比例関係や各建物の絶対的な位置関係を操作し、羅列的、説明図的に表現する事に、これら諸本の大きな特色がある。これらは、類書中最も数が多く、明治期の銅版画商家資料の基本的な傾向を示す。

③写真ないし西洋的透視図法に基づくもの

「博覧図」を書名とするものの大半がこれに該当する。低い視点で主屋を中心的に描く構図と、上方に視点を持ち、敷地全体を俯瞰する構図がある。俯瞰図は主屋に付属建物も加えて家屋敷全体を表現する。ともにその形態や比例には破綻がなく正確である。低い視点のものに写真を下絵として作成されたものがあることが確認できる。

（４）資料の系譜

①江戸期の買物独案内を祖型とするもの

銅版画による商家等の案内冊子類は、江戸期に刊行された木版の買物独案内を祖型とするものを本流とする。江戸期の買物独案内類は、屋号、所在地、営業種目、家印等を示すものであり、各商家の店構えが図示されることはない。

これに対し、店構えや店頭での営業の有様を表現する銅版画が加えられたのが、明治期の新たな動向である。本来、買物に際して持ち歩くものであるため、その体裁は江戸期のものを踏襲した小型横長の袖珍本となる。

刊行の拠点となるのは、大阪や堺であり、垣貫一右衛門や川崎源太郎などが、中心的な存在となる。これら先行する刊行物の体裁に倣い、凡例なども剽窃の謗りを恐れず同表現とする後続の出版も各地で相次いだ。

掲載される銅版画の家屋は、横長の構図の制約のため、1 階に対して 2 階高さを低く描くのが通例であり、屋内外の人物、道具、商品を比較的詳細に描く点も共通する。また、家屋が群となる場合は、位置を適宜入れ替え、大きさを調整し、向きを変えるなどの操作を行い、多くの要素を図示することに意が払われ、各室の内部の情景を表現するため、室内にそれぞれ異なる消点を導入する傾向も認められる。西洋的な遠近法の徹底や比例の正確さには関心は払われない。図版の原画製作や銅版彫刻に関わった者が明示されることは少ない。

後続の編集出版者による単発の刊行物の中には、稚拙で、混乱の著しい構図の掲載図も散見される。それらも対象となる家の当主が認めたものであり、それを掲載した刊行物が商品として罷り通っていることになる。簡便な絵入の刊行物が必要とされた一方で、銅版画制作技術に優れた画工は地方では確保困難であったという状況があり、また絵を受け入れる側もその巧拙にはかなり無頓着であったことを物語るものであろう。

以上のような、江戸期の買物独物案内の発展として位置付けられるものは、主に都市部を対象とするものであり、明治 20 年代前後の商家の店頭の状況を巧拙の差はあれ、明確に示すものとなっている。近世的な店構えや営業形態が根強く継承されている一方で、立売、正札販売、２階での営業、洋風意匠の導入などの新しい側面が次第に定着していく状況が確認できる。

②『日本博覧図』の系統

一方、もう一つの大きな潮流は『日本博覧図』の系統である。買物独案内の系譜のものが都市部を舞台とし、かつ刊行の拠点が堺や大阪などの関西であるのに対して、『日本博覧絵』は東京に刊行の拠点があり、視点を明治期の農村部に据え、地方名家や各種の製造所を主として取り上げる。

地方名家は主に農業や醸造業を家業とするものであり、養蚕、煙草製造、藍玉製造、製茶などの近代的な農村産業の各地での進展を確認できる。描図対象は主屋に留まらず、敷地全体に展開された作業場、納屋、土蔵、庭園などに及ぶため、俯瞰的構図を用いて敷地全景とその周囲を表現するのが通例である。図版の原画製作や銅版彫刻はかなり多数が関わっているにも関わらず、図の形式はほぼ一定しており、またその比例や形態はかなり正確である。

しかし、買物独案内に出自を持つものでは、家屋の建築的な形態の正確さは劣るとしても、店頭の営業の状況の表現には並々ならぬ注力がなされるのに対し、『日本博覧図』類では店先は建具で遮蔽され、殆ど表現されない場合もある。また、人物も殆ど表現されない。

③名所案内

また、これらの中間に位置するものとして、名所案内を主眼とする刊行物中に土地の商家や農家を加えたものがある。

（６）明治期商家銅版画資料に見る各地の洋風家屋の定着

明治期商家銅版画資料を用いた分析の一例として、描かれた家屋における洋風の進展を検討した。洋風は家屋の表構えで識別し易い次の 9 項目を指標とし、これらのうち 1 つでも当てはまるものを洋風家屋とした。

開口部（縦長窓、アーチ窓、鎧戸）/外壁（腰積）/基壇/隅石/柱（柱頭）/柱礎

洋風家屋の出現例は、多い地域と少ない地域に明らかに二分できる。出現例の多い地域は、北海道が圧倒的であり、他に東京、新潟、金沢、鹿児島各市を含む地域が挙げられる。これに対し、大半の地域では明治 10～30 年代には、なお江戸期に成立した家屋が優勢であり、洋風要素を持つ家屋は極めて限られている。

しかし、このような地域でも、業種によっては立式家具の使用、立売の商業形態、２階の全面的使用などが観察できる。近代化はここで指標とした洋風意匠要素の導入とともに、伝統的な店構えの家屋の中でも徐々に進行していることが看取できる。

（７）明治期商家銅版画資料の意義

これらの資料は、身内を協働者として零細な刊行を行う例が多く、序や凡例への先行書の表現の流用も確認できる。また同一図版から二次的、三次的な刊行物を作成する例、内容の追加・削除による異版の例も少なくない。図版は芸術的な表現力や形態的な正確性の観点からは、稚拙なものも少なくないが、家々の生業、営業形態、商品、家屋群の具体的形状や配置、各家の由緒等を、読み取ることができる。

これらは資料群としては、①刊行時期が明治 10 年代から 30 年代までのほぼ 20 年間ほどに限られる、②作成目的や表現方法が類似する、③全国各地域を対象とする刊行物がある、等の特色があり、各地の明治期商家の実態を全国的な視野で把握できる学術資料として重要である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計１件）
菅原洋一、（挑戦的萌芽研究）研究成果報告書、『明治期商家銅版画資料に関する歴史情報学的研究』、2015 年 3 月,228 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
菅原　洋一（SUGAWARA YOICHI）
三重大学・大学院工学研究科・教授
研究者番号：　70144227